

令和元年6月

塩那森林管理署長 山口 孝

1. はじめに

塩那森林管理署に赴任して1年が経ちました、ようやく管内の様子も一通り頭に入ってきましたので、当署の取組等についてご紹介したいと思います。

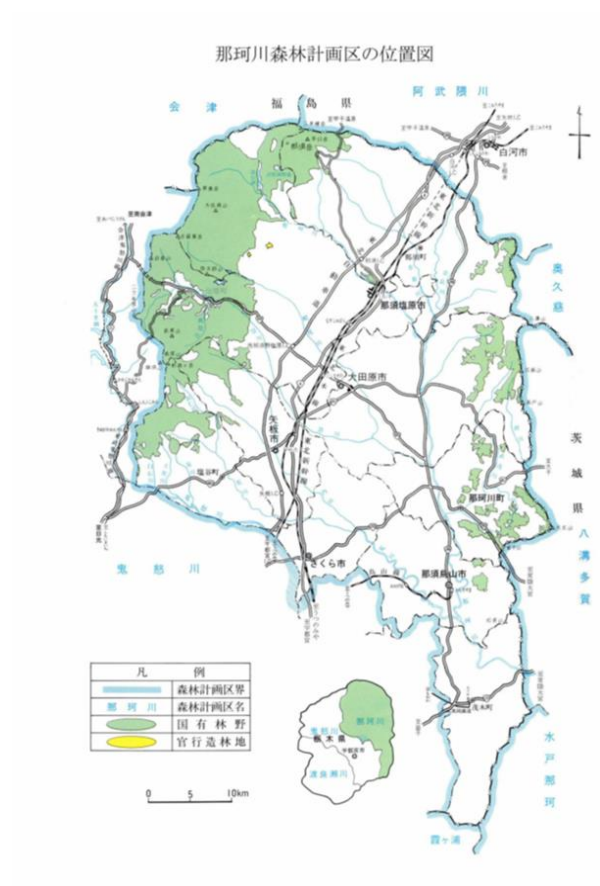
塩那森林管理署は栃木県北部の大田原市にあります。平成10年までは大田原営林署でしたが、隣接の矢板営林署と統合して今の名称「塩那（えんな）」になりました。

この「塩那」は塩原温泉郷で有名な「塩原」と百名山で有名な那須岳を有する「那須」の二つの地名の頭文字をとったものです。塩原は旧矢板営林署管内、那須は旧大田原営林署管内にあります。ちなみに「大田原」と「那須」の二つの地名をとって「大那（だいな）」という名称も使われており、管内には、この「塩那」や「大那」という企業名などの看板がよく目につきます。

2. 管内の概要

塩那森林管理署は栃木県の北部から東部にかけて、那珂川森林計画区内の大田原市、矢板市、那須塩原市、那須烏山市、塩谷町、那須町、那珂川町の7市町に広がる約4万1千ヘクタールが管轄エリアですが、大きく2つのエリアに分かれて所在しています。

その一つは、主に北西部の福島県境から南西部の日光市との境にかけたエリア（本稿では「左ウイング」と呼びます。）で、2,000m近い山々が連なる那須連山、男鹿山塊、高原山と大きく3つの山塊に管内国有林の約8割、3万4千ヘクタールがほぼ一団となって分布しています。こちらのエリアの国有林は天然林を主体として自然度の高い森林が多く、その大半が日光国立公園に指定されています。とりわけ全国的にも有名なのは深田久弥の日本百名山にも数えられている那須岳です。首都圏から近くアクセスも良いこと、さらに、山麓から那須岳の主峰茶臼岳の9合目まではロープウェイが整備されていることから、誰でも気軽に登山を楽しめます。



茶臼岳は那須連山の中でも最も新しく約1万6千年前に活動を始めた活火山であり、約600年前の噴火では死者が200名近く発生した記録が残っています。直近では1963年に小規模な噴火が発生したのが最後となっていますが、今なお常時噴煙を上げている中で、噴気孔の直下に登山道が整備され、硫黄ガスに包まれながらのスリリングな登山が楽しめます。標高は1,900m程度と決して高くはありませんが、アルプスの3,000m級に匹敵する荒涼な岩稜歩きが楽しめる関東随一の登山エリアでもあります。



那須連山の主峰：茶臼岳

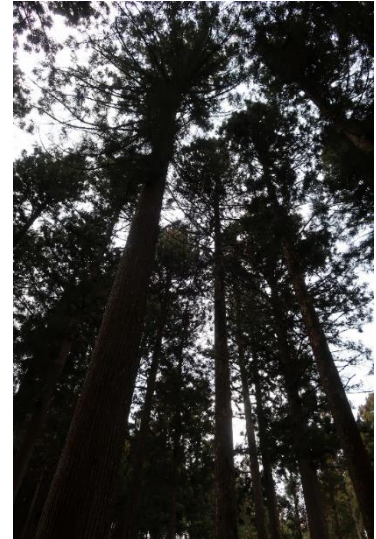
(左斜面の噴煙のすぐ下を登山道が通っています。)

また、山腹から麓にかけて那須温泉、塩原温泉といった歴史ある温泉地、さらに天皇家が避暑に訪れる那須御用邸をはじめ観光スポットが多いロイヤルリゾートとも称される那須高原など、全国的に知名度の高い観光地を抱えており、今年の改元を機に一層の注目が高まっています。外国人観光客の数は日光には及びませんが、徐々に知名度が上がってきており、地域全体に活気が出てきている状況です。

残りの約2割の約7千ヘクタールが県東部の茨城県境の八溝（やみぞ）エリア（本稿では「右ウイング」と呼びます。）に広がっています。ここは茨城県と福島県境に位置する八溝山（標高1,022m）を主峰とする八溝山地の麓に広がる地域で、八溝林業地帯として全国にも名が知られている伝統ある林業地です。このきっかけとなったのが、江戸時代末期の嘉永2年（1849年）に当時の黒羽藩士興野隆雄（きょうのたかお）が父子2代にわたる造林、育苗に係る事柄を体系的にまとめた手記「太山の佐知（とやまのさち）」を領内に配布したことに始まったといわれています。以降、植林を率先する人も次々と出てきたこともあり、地域全体で盛んに植林が進められ林業が盛んとなっていきました。さらに、八溝地域は傾斜も比較的緩やかで、スギやヒノキの生育にも適している土壤等の自然条件であったことも拍車をかけたと思われます。国有林も積極的な植林を進めてきた結果、現在の人工林率は80%を超えており、全国の国有林でも屈指の人工林地帯となっています。このエリアから産出される丸太は「八溝材」と呼ばれ、市場から高い評価を受けています。



大田原市内からの八溝エリア（遠望）



管内で最も古いスギ造林地
（須賀川地区にある 126 年生）

このほか、管内や近隣県には全国屈指の規模を誇る製材工場が数多くあり、国産材流通の一大エリアとなっており、そこで生産される製品の多くが大消費地である首都圏に出荷されています。人工林の多くが主伐時期を迎え、地域で生産される丸太も徐々に大径化しつつあります。こうした大径材が今後をさらに増えていくことも見据え、近年では製材ラインの新設等の設備強化を図っているほか、バイオマス発電所も次々と稼働を始め、地域全体の木材需要が高まっており、当署もこうした需要に的確に答えていく必要があります。

3. 現在の主な取組について

こうした状況の下、塩那森林管理署で進めている取組の一部をご紹介します。

（1）民国連携の推進

昭和から平成という時代においては、人工林の育成段階でもあったことから民有林、国有林がそれぞれで山づくりを進めてきました。その人工林が利用時期を迎え、また、丸太の安定供給という需要者ニーズに応えていくためにも、所有形態を越えて、地域全体で安定供給体制を構築していかなければなりません。当署でも大口の需要者に1年を通じて丸太を供給するシステム販売に10年以上前から取り組んでいますが、2年前からは民有林材と共同で販売する民国連携システム販売にも取り組んでいます。まず、低質材と呼ばれるチップ、バイオマス用の丸太の共同販売を始めたところ、需要者側は量が増えることでさらに安定的な材の確保につながり、さらに森林所有者である山側にとっては、これまで販売が難しかった低質材を、量をまとめることで相場よりも高い価格での販売につながるなど、双方にメリットがある取組となり、年々民有林からの販売量が拡大しています。さらに今年度からは合板・集成材向けの丸太（短尺材）も連携して販売していくこととしています。

とりわけ右ウイングの八溝エリアは民国合わせた人工林率が約 80%と豊富な森林資源を抱えており、また、民有林と国有林が団地状に隣接しあっており、民有林と国有林が連携しやすい立地条件にあります。令和という新たな時代に入り、民有林と国有林がさらに連携することで林業の成長産業化の実現を図っていきたいと考えています。



民有林と国有林が連携し需要に見合った丸太を安定供給することで川上・川下にもメリットが生まれています。

(2) シカ被害への対応

全国的にも課題となっているシカ被害への対応ですが、当署でもシカの増加に伴い、様々な被害防止対策に取り組んでいます。特に生息数が増大してきたのが管内左ウイングの矢板市、塩谷町、那須塩原市塩原地区です。地元の森林組合長によれば、矢板市では平成 15 年ぐらいからシカによる食害が徐々に始まったとのこと。栃木県の調査によれば、その当時県全体でも 2 万頭に満たなかったものが、10 年程度で一気に 3 万 2 千頭まで増加しました。その後、有害駆除等を本格的に開始し、現在は若干減って約 2 万 7 千頭と推定されており、令和 5 年度末までに 1 万 1 千頭に抑える目標を立て対策を進めているところです。

現在、当署では、植栽地には防護柵や単木の保護具を設置するほか、壮齢人工林についても剥皮被害防止のためのテープ巻きを行っています。さらに、平成 29 年度からくりわなによる有害捕獲事業を開始し、昨年度は約 1 か月間行い 55 頭を捕獲しました。

今、県の関係者が一番恐れているのが、右ウイングである八溝地域へのシカの侵入です。徐々に目撃例が増えているのが実情であり、全国屈指の林業地帯へのシカ侵入を何とか防ぼうと関係者一丸となってモニタリング等に取り組んでいます。

国有林も、当署だけでなく隣接する茨城、棚倉森林管理署にとっても八溝地域は人工林地帯であり、何としてもシカの侵入を防がなければなりません。各署と連携をとりながら生息実態をしっかりと把握し、効果的な対策を講じていきたいと考えています。



剥皮被害防止のための保護テープ



くくりわなによるシカの捕獲

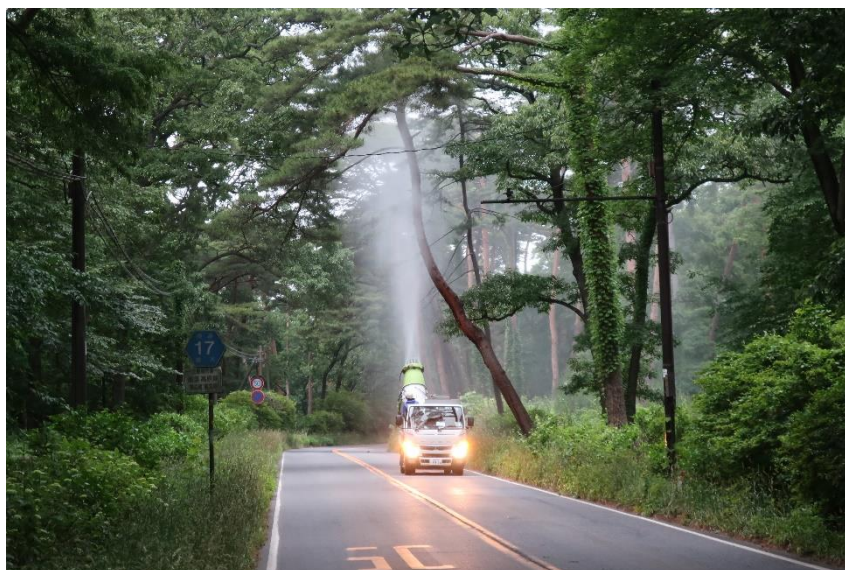
(3) 国民参加の森林づくり

管内那須町の市街地の一角、県道17号線の両側に延長2.6kmにわたり、100年前後のアカマツを主体とする約80ヘクタールの森林が広がっています。この森は「那須街道アカマツ林」と呼ばれ、毎日多くの市民が散歩等に訪れる地域住民の憩いの場であり、また、アカマツの大木はオオタカの営巣木として利用され猛禽類の生息地にもなっています。かつて、昭和天皇が那須御用邸で静養される際には、この森林をご覧になりながら御用邸に向かわれていたこともあり、見事なアカマツ林であると著書でお記しにされるなど、那須を代表する景観の一つでもあります。

地域のシンボルでもあるアカマツ林ですが、ここも御多分に漏れず松くい虫の被害を受けており、30年前は2万本あったアカマツが現在は約8千3百本まで減少しています。毎年、カミキリ駆除のための薬剤の地上散布や被害木の伐倒駆除、さらに被害を防ぐための薬剤の樹幹注入などを行うことにより、なんとか被害の拡大を食い止めている状況です。

このままでは慣れ親しまれてきたアカマツの美林の景観がなくなってしまうため、伐倒して大きく空いてしまった空間に、地域住民やNPOと協働して次世代のアカマツを育てる植樹等の取組を続けています。市街地に隣接しているため、植樹したアカマツの生育状況を気軽に確認できる場所でもあり、毎年のように植樹に参加していただく方も多くいらっしゃいます。

かつてはアカマツの落葉落枝等が地元農家に広く利用されていましたが、原発事故以降はその利用も途絶えてしまい、徐々に広葉樹が優勢となりつつあります。アカマツにとっては他樹種との厳しい生存競争にさらされている中で、この歴史あるアカマツ林の維持・再生に取り組んでいるところです。



那須街道アカマツ林での薬剤散布作業
(カミキリムシの羽化する毎年6月に実施)

4. その他管内国有林の紹介

最後に、あまり普段はPRしていない隠れたスポットが管内国有林にはいっぱいありますが、厳選して2つご紹介します。

(1) 大佐飛山（栃木県で一番遠い山？）

管内那須塩原市に大佐飛山（おおさびやま）という標高1,908mの山があります。

平成18年に山頂を含む約8千ヘクタールをこの地域固有の生物群集を保護・管理していくため「生物群集保護林」に設定しており、コメツガを主体としてオオシラビソ、ダケカンバ、ハイマツ等も見られる原生的な森林が多く広がっています。山頂から北東斜面の一部が自然環境保全法に基づく自然環境保全地域にも指定されています。

地元の下野新聞が2004年に選定した栃木百名山にも選ばれていますが、その中でも1,2位を争う登頂困難度の高い山、栃木で一番遠い山とも言われています。なぜなら、麓からはその山頂はうかがい知れない奥深い場所にあるのに加え、登山道が整備されていないのです。そのため、無雪期は深い藪、冬季は深い雪に阻まれ、登山のチャンスは唯一春の残雪期に限られています。私自身、いろいろなブログ等を見てこの山を知り、管内国有林でもあり是非とも登りたいと思っていました。署のOBが地元山岳会に所属しており、しかも大佐飛山の登山経験もあったので、同行を頼み込んで、今年の4月に往復11時間かけて登ってきました。当日は快晴、風も強くなく、絶好の登山日和でした。週末で快晴という好条件が重なり、他にも多くの登山者が大佐飛山を目指していました。そのおかげで、踏み跡（トレース）がしっかりとつけられており快適な登山となりました。特に、山頂手前の尾根は雪で覆われ「天空回廊」とも呼ばれ、素晴らしい眺めを堪能しながら尾根歩きを楽しむことができました。



天空回廊からの大佐飛山

(無雪期は藪で覆われており、残雪期のみこの景色を楽しむことができます。)

(2) おしらじの滝 (インスタ映えで注目度急上昇！)

管内矢板市内の高原山麓の国有林内にある滝です。県道の駐車スペースから 10 分ほど山道を下ると、突然目に入ってきます。

これまでは知る人ぞ知るといった、栃木県でもあまり知られていない滝でしたが、最近の SNS の普及に伴いインスタ映えする滝として注目され始めました。特に、降雨直後でないと滝として流れている姿を見られないため「幻の滝」と言われていることや、滝壺の息をのむような独特の透き通った青色が特徴です。巷では「おしらじブルー」と言われ、この春からは市内の食堂で青色スープの冷やしラーメンも登場するなど、矢板市の観光の目玉となりつつあり、アクセスとなる歩道も整備するなどその PR に力を入れています。私は昨夏に訪れましたが、運よく滝の状態で見ることができました。



5. 最後に

塩那森林管理署の管理経営する国有林は右ウイングと左ウイングでは立地条件や資源状況が大きく異なり、それぞれの地域の国有林に対する要望も大きく異なります。国有林を取り巻く状況や抱えている課題等を地域ごとにきめ細かに把握しながら、どうすれば国有林が地域の役に立つことができるか、職員が一丸となって知恵を出し合いながら、令和という新たな時代の「塩那森林管理署」を築き上げていきたいと考えています。